

コード・オレンジ

ー心配蘇生法の普及を目指してー

代表者 山本章太（医学B 4年）
構成員 鈴尾舞子（医学B 4年）岡村菜々子（医学B 4年）棚橋信子（医学B 4年）
小川亮（医学B 4年）有吉平（医学B 4年）
中島彰子（医学B 4年）田原正則（医学B 4年）
梶山恒（医学B 4年）吉田雄一郎（医学B 4年）

1. 今年度を振り返って

今年度のコード・オレンジの活動は多岐に渡った。イベントとしては6月の運動部講習会と山口県の教職員に対してのBLS講習会、9月の医学科フレッシュマンセミナーでの講習会、10月のメディカルラリー（後述）の参加、11月の医学祭での講習会、2月の宇部駅伝の手伝い、ACLSワークショップ（後述）の参加、などである。以下、各イベントの内容を詳細に列挙する。

2. 運動部講習会

6月22日に医学部運動部に対してAED講習会を行った。結果としては非常に活気ある講習会になったと自負している。

受講者数は80名程度、インストラクターは12名、受講者には8ブースに分かれてもらった。病棟実習をされている5年生の先輩方と山口大学医学部附属病院AMEC3の笠岡先生にも協力いただいた。

まず、5月下旬～6月上旬にかけて笠岡先生と講習内容（胸骨圧迫や人工呼吸のどこに重点を置いて解説するべきか、講習の際の人員配置はどうするべきか、来年以降のガイドラインの変更についての推測とその対応など）を煮詰める時間に当てた。中でも難渋したのが、講習時間の短さと1ブース毎にインストラクター2人に対して受講者10人という余裕のない状況でどのように的確かつ円滑に講習を進めていくかということだった。笠岡先生との協議の結果、まず教える手技については来年のガイドライン改定（人工呼吸の重要度や必要性がガイドライン2005より低くなること）を見越して胸骨圧迫をメインに教えることにし、通報→胸骨圧迫→AED使用の3つの作業をより重視して講習した。そして講習に際しては各手順を大きく書いたプリントを用意し、受講者側にもバイスタンダーCPRの手順がわかりやすくなるよう工夫した。それと平行して各ブースに分かれる前に全体でデモンストレーションを行った。

講習自体は相手が医学生ということもあり、会場は大変な熱気に包まれていた。自身のブースでは質問も積極的に出てきており、講習する側としても心配蘇生法の理解がより深まった。



運動部講習会の様子（胸骨圧迫）

3. 山口県教職員に対してのBLS講習会について

6月28日には山口大学医学部附属病院 AMEC3 が主宰する山口県教職員に対してのBLS講習会のサポートを行った。

講習内容は成人BLS、小児BLS、気道内異物除去の3項目であった。成人と小児ではいくつか手技や手順にも違いがあり、受講者の方はその差異の把握に手間取っていたように感じた。具体的には通報の順序の違い（成人ではすぐに通報だが、小児ではCPRを行った後の通報が推奨されている。これは小児の心肺停止では成人と異なり、呼吸原性-呼吸が止まることによる心肺停止が主な原因となっているからである。）や胸骨圧迫の方法（成人では両手を使って行うが、押しすぎてしまう、携帯電話で通報をしながら、などの場合は片手のみで胸骨圧迫を行う手技がある。）などである。また、気道内異物除去は基本的にはハイムリック法（後ろから手を回して腹部を突き上げる方法）で行うが、手技に慣れていない場合は時間がかかったり効率よく異物を除去できないことがあるため、教育現場での更なる講習充実の必要性を強く感じた。

4. 医学科フレッシュマンセミナーでの講習会

9月25日には医学科1年生を対象としたフレッシュマンセミナーでの講習会を行った。

受講者は今年度入学の医学科1年生80人、インストラクターとして救急救命科で実習を行っている3年生3人とコード・オレンジより2人が参加した。

平日の昼間の開催ということで自身や主要なメンバーは授業があり参加が不可能であったが、3年生と6年生のメンバーがムードメイカーとなり講習を引っ張ってくれていたと聞いている。医学部学務課の方からも1年生の印象は非常によく、また是非依頼したいとお言葉もいただいた。

しかしながら、平日の昼間に講習会が行われると医学科の学生は基本的に参加が難しいため講習時間を夕方に行うことや土曜日に行うことなどの改善があれば主催側である学務課の方にとっても、インストラクターを派遣するコード・オレンジ側にとっても有益であると考えます。

5. メディカルラリー

10月17日には島根大学主催のメディカルラリーにボランティアとして参加した。

メディカルラリーとは、一言で言えば「救急救助のチームの技能を競うコンテスト」である。ここでいう技能とは、災害や傷病発生現場の周囲の安全確認や安全確保の技術、実際的な救急手技、その他救急救助（※これは病棟での救急救命とは異なる、現場での一次的な処置である）の手技・技術のことである。

具体的には交通事故を起こしたバスの内外であったり、不振人物が乱入し周囲の人を殺傷した現場であったり、高層階で心停止を起こした現場であったりする「場」を想定してチームとしての救急隊や救急科の技能を客観的に評価する。そのようなコンテストである。

関西地方（千里など）ではある程度の歴史があるコンテストであるが、学生主体で、かつ中国地区で、というのは前代未聞であつたらしく、その名誉ある初回の中国地方メディカルラリーにボランティアとして参加することができて光栄であった。

ボランティアとしての参加者の共通の感想として、「医師の現場での技能の低さ」（※これは病棟を主戦場とする医師にとっては至極当たり前のことであり、決して能力の無さを批判するものではない）を指摘するものが多かった。山口大学附属病院でもドクターヘリの導入を予定していたりするので、その際には救助隊に倣った安全確認や安全確保の技能などなど、いわゆる現場での一次処置の技能を取り入れる必要性の高さを実感した。



メディカルラリーの様子（交通事故）

6. 医学祭

11月14～15日には医学祭にて一般の方を対象とした講習会を開催した。

スタイルとしては4つのブースと担当インストラクターを用意し、呼ぶ込みを行い、各々の担当インストラクターがBLSやFBAO(気道内異物除去)や体位変換(うつぶせの人を仰向けにする手技や回復体位)を講習した。

受講者数は前年度に比べ30人増加の132人。インストラクターも医学祭のみの手伝いの方も含めて20人前後と、医学祭のイベントとして大きな一角を担うことになったと自負している。

準備は夏季休暇が終了した直後の9月から。まずは全インストラクター向けに手技とその意味の勉強会を再び行い、知識の充実に努めた。その後、10月からは実際に手技を練習したり、講習の口調や伝える内容の吟味に当たった。教える内容は基本的には6月の部活動講習会で教えたとおり、通報→胸骨圧迫→AED使用の3つのフェーズを重点的に講習することでインストラクター間の合意を得た。6月と違って講習を受ける側は一般の市民の方なので口調や語彙についても吟味し、「よりはっきりした口調」で、「よりわかりやすい言葉」で講習を行うことも確認した。

当日は懸念していた天候にも恵まれ、充実した講習を行うことができた。受講者の方から直接聞いたり、アンケートを見る限りでは講習内容に大変満足されている方が多かった。医学祭についてのアンケート内容の評価や検討は最終報告会のスライド発表で重点的に行う予定なので、ここでは割愛する。

しかしながら、アンケートから浮き彫りになった課題を端的に言うと「会場、設備の不備」である。会場までの階段が薄暗かったり、受講者の数に対してブース数や練習用人形数が不足していたり、と改善の余地は多かった。次年度はこれらの改善を念頭においてより満足度の高い講習を目指したい。



医学祭の様子（ブース内にて）

7. 宇部駅伝競走大会手伝い

2月7日には第27回宇部駅伝競走大会での救護係としてAEDと救護セットを担いで自転車でコースを周回するボランティアを行った。

宇部駅伝競走大会は毎年開催されている歴史ある行事で、常盤公園内の常盤湖畔を周回する一周6.6kmのコースを駅伝形式でたすきを渡していくものである。もちろん今までも救護係の待機はされていたが、今回はAEDと救護セットを持った学生が選手と一緒にコースを走る。そのことによって心停止患者が発生した場合に迅速なAEDの使用を実施することができるという大きな利点がある。

元医学部自治会長の徳永さん（個人で参加されていた）とコード・オレンジ側8人の計9人で3台の自転車にのり周回した。今回は幸運なことに一人の傷病者もなく、駅伝を終えることができ安堵した。

もちろん、AEDや救護セットを利用しないに越したことはなく、私たちがAEDを持って派手な服を着て（写真参考）一緒に走るというその「スタイル」や「ポーズ」にこそ意味があるのであり、心停止の危険性や怪我の可能性を喚起できただけで私たちの役割は十分に発揮されていたと確信している。この活動も次年度以降に引継ぎたい。



宇部駅伝競走大会手伝い（救急バッグとオレンジ色のベスト）

8. ワークショップの参加

3月20～21日には九州大学医学部で行われた ACLS ワークショップに参加した。

ACLS ワークショップとは企画・運営をすべて学生で行い、BLS・ACLS の手技を身につけることができる全国規模の勉強会である。全国の様々な大学で行われているが今回は九州大学主催の第5回 ALL 九州 ACLS ワークショップに参加者として参加した。ワークショップには参加者とインストと呼ばれる二通りの参加方法があり、初回参加の場合は常に参加者として教えられる立場に。2回目以降の参加の場合はインストとして教える立場になる。今回は参加者25名（うち2名がコード・オレンジ）、インストが75名と大変手厚い。

内容を少し詳しく記すと、成人 BLS、乳児 BLS、FBAO（気道内異物除去）、Airway（気道の確保と気管挿管）、Monitor（心電図の見方）、心停止初期対応、Vf/Pulsless VT、PEA/Asystole、MEGA（総合演習）などであり、一人でできる手技からチームとして行うチーム医療までを網羅した内容である。学生主体といえども、その講習で使用するシナリオや練習用機材は実際の救急救命科の先生の手によるものであり、多少の不備はある（※ワークショップに参加したからといって何か具体的な社会的資格を得るものではないという点など）ものの完成度は非常に高い講習会である。もちろん BLS の講習は私たちコード・オレンジとしての活動に直結していることは自明であるし、ACLS（病棟での二次救命処置）も知識としてもっているに越したことはない。その2つの意味で非常に有意義な講習会（勉強会）であった。

ACLS の内容を踏まえて BLS にトップダウン式に知識を充実できる上、BLS から ACLS までを一連の流れとしてみることができ、一般市民に講習を行う一インストラクターとして、また一医学生として刺激を受けることができた。次年度の以降の申請ではこのワークショップの参加のための移動費なども考慮願いたい。

9. 清掃活動

医学生としての規範と献体をされた方々への感謝の意をこめて、1ヶ月に1回程度の頻度で頌徳碑の掃除をコード・オレンジメンバーで行った。

具体的には頌徳碑周りの雑草抜きや落ち葉の除去、学務課に対する献花の要求などである。これによってコード・オレンジの活動に興味をもってくれる学生や学務課の方が現れたり、全く予想をしていなかったメリットがあった。もちろん、医学生としての意識が高まったことも大きい。

10. 総括とこれからの展望

以上のように、学内・学外を問わず様々な活動に参加し組織としての知識・技能の向上に努め、それを市民の方に還元してきた1年間であった。

次年度の展望としては、更なる内部への深化と外部への開示を徹底したい。

具体的には11月に行われる宇部祭りで救急救命科の看護師方と協力して一般市民の方に講習をおこなったり、ワークショップに積極的に参加して更なる知識・技能の向上に努めていきたいと考えている。